

ぶらっとサロン通信 令和2年7月増刊号



毎週火曜日の午後1時過ぎから午後4時半ごろまで、朝日2丁目集会所で「健康麻雀ミーティング」をワイワイガヤガヤとやっていたのですが、新型コロナウイルス感染拡大防止の為、自粛し**現在休局中**です。

今号は、椿(ツバキ)の語源について案内(列挙)します。語源については諸説あります。(文中敬称略/木下武司「万葉植物文化誌」等を参照しました)

- ① ツバキの語源が朝鮮語の Dongbaek (ツンバック「冬柏」) に由来するという説(深津正/植物和名語源新考/1989年)。最初の提唱者は与謝野鉄幹で、自ら創刊した雑誌に「冬柏(とうはく)」の名を付けました。後に、朝鮮語に詳しい言語学者中島利一郎が「つばきの語源が朝鮮語冬柏(ツンバック)に繋がることはほとんど疑いないと思われる」(植物語源考/1938年)とお墨付きを与えましたが…(?)。
- ② 万葉集(7世紀中ごろから8世紀中ごろ)でツバキを詠んだ歌は11首あり、原文は全て万葉仮名を含む漢字で表記されており「都婆伎」「都婆吉」から、当時の発音が確かに“つ・ば・き”であったことがわかる。「海石榴」(2首)「椿」(3首)「玉椿(たまつばき)」(2首)「玉箒(たまははき)」「多麻婆波伎(たまははき)」となっています。
 - ①1 「海石榴」は『延喜式』(延喜五年(905年)に編纂)の賜蕃客例条に、遣唐使が持参した唐皇帝への朝貢品リストに海石榴油六斗とある。石榴は西アジア原産のザクロのことで、海石榴油が植物由来の、海を渡ってきた油を意味することは明らか(椿油!?)。
 - ①2 「玉箒」万葉時代にも初子の日の祝いがあり、燃燈草(ねんとうくさ)で作った箒(これを玉箒と称した)を小松に取り付けて掃くという風習があった。「玉椿」=「玉箒」から、ツバキは常緑で神木として崇められ艶のあつて生命力の溢れる厚い常緑の葉…(!?)。
- ③ 現在でも、ツバキを外來樹木と信じる日本人は意外に多い。東北地方日本海側にあるユキツバキ(Camellia japonica var. Rusticana)を、朝鮮南部のツバキが対馬暖流に乗って人の移動とともにもたらされたと考える意見がある。この説の原典は柳田國男全集(第12巻「豆の葉と太陽」～北限地である夏泊のツバキに関する伝承としての逸話を紹介している)にあるようだが…(?)。
- ④ ツバキは朝鮮半島の南部海岸付近にわずかに存在する照葉樹林にしか見られず、ソウルあたりでは栽培可能であっても開花は困難であり、三韓時代のそれぞれの都でも同様と思われ、半島内陸では寒すぎてもともと亜熱帯性植物であるツバキは花が咲かない。※つまり朝鮮半島では対馬暖流の洗う温暖な辺地のツバキしか花実をつける個体はないのでツバキの利用があったとは考えにくく、朝鮮半島から名前を拝借しなければならない理由は全くない…(!?)。
- ⑤ 江戸時代に、ツバキの語源として厚葉木(あつばき)が訛ったという説(貝原益軒)と葉に光沢があるので艶葉木(つやばき)が訛ったという説(新井白石)が当時の一流の文人により提出されているが、どう転んでも通俗的な語呂合わせのレベルにすぎない…(?)。
- ⑥ ツバキが信仰に関連することは民俗学の折口信夫も指摘しており、口から吐く唾が占いと関連があり、ツバキが唾(つばき、つはき)に由来することを示唆しています(折口信夫全集第2巻、中央公論社、1982年)。
- ⑦ 煬帝から1世紀ほどのち、中唐の詩人・柳宗元は『柳河東集』に海石榴が蓬萊や瀛州(えいしゅう)から来たことを示唆している。蓬萊や瀛州は、秦始皇帝の時、徐福が不老不死の仙薬を求めて山東半島から船出し目指した海東の神仙の地(倭国のこと)で、当時の中国知識人に海石榴は海の向こうの倭から来た石榴という認識があった…(!?)。以下次号